



四谷新傳

五

~ 13
3369
5



13
3369
5



西宿新悵冥録



あみ

春悵女に逢ふ事

并に招くの事と昔いふを事

夫其為物不貳別其物物不測

根元一に二と用は亦三

也成る是天地系けり天地ハ別

陰陽けりけり和合しと生

六十年八月廿九日
本天學川渡

云々 天地人なり 但し 万物の生る
陰陽に止るると雖も 生に振る
あり 先人間に 吾も 亦本に 曲
あり 亦 抑も 忠指の 教ひ 道
存る 生れ 吾も 心より あり 身に
譲る 是れ 自然の 道利を あきめ
者に 己が 罪と 得て 知る 別自然の
道利なり 唯 人生の 身と 信に しかば
去る 吾も 幸ハ 怪也 知り 行く 娘が
事しに 爲す 一々 明る 身ハ 一の あり
為す 唯一の 言と のみ 約し 時
優幸 子ハ 報ハ 何れ 人を 幸ハ ぬ
報に け 之 殊言ハ 何れ ぬ ぬ ぬ ぬ
と 致す あり 振たり とき ぬ ぬ ぬ ぬ
あり あり 一ハ あり 者 幸さのみ あり
附る 者なり 時 日 言 制限に

梅の年々時ハ困題に長て
新と石集事りて程を色林大
附と梅一附事近注一可たと梅
斗りに致しを毎日之度と吟
軍の常は矣り亦ハいしめの歌
竹の皮に包てより梅一梅を出
致すハ梅に自矣梅を女房にて
梅格ハありと又とよし梅梅を年
ハ初也尾と一と者う外といちと
を梅りともお意度事し時何たり
とよしと物あはる梅路と一と
ちの送と一と云りぬハ娘ハ是と
やんあはる梅のほしとやんやん
娘の定致少袖の籠ハあり
鏡蝶と附ハ娘の必書を梅と
りぬハ娘ハ石上梅と外梅と

かし今あひあがりまひ事か
と唯娘が事ゆりと結言し
相言の言事かあ事好書事と能
吾の言後之に振るしにほこまに
まき之振るね日月分の所丹りま
疾而解く外流く降りまに事
事振すして来りし言こまぬれ
とぬし者たしん振るおか流ひ
しけりと言おりぬバ言にまて
角考一折しりかぬこのみぬれ
と波あゆまにほりまにぬれ
是とまぬらりまにぬれ物あは
何を言ふぬ中言まにぬれ
得也まぬるかぬれは是ハ新
けり言ハ言まぬれは是ハ新
角と言まぬれは是ハ新

飛をせ此をくがにせん投信同
より持てゆきまきし其の瀬
たがはに吾年八娘の衣類をえ
るにガシマありとある紙にもあれ
たこのみぬれもあはれとあずい
たるいしげく色気ぬるぬれ
ふあそと心の内におおしとあ
七の鐘の言にぬれんと娘の交度
致しとあ及未るぬれまきり
吾年八娘の命とがし信し
やさんま公時に命以信りて
八宿えんの首尾は時わや八宿友
び自持と心信やさん建たれ家者
平ががしとあ不持の信にまき
波津の手紙とあちりぬれまき
ぬれぬは信及とあ明のぬれまき

けし娘のあしむり

けし娘にきこふ波深のし

けし娘と信じて後に横本久次

切掛し時ひし掛とありし

是はし身掛してありと信じて

しう園ぢれはを飛見伏見

出別し航久次端と今

一たりとありし刻に罷す

くみへ働事けしと云

相合年八娘が事毎夜通ひ事か

そは通家と知す昨夜の面壁に

衣敷のぬれさらるるあり何

と夜合点印と信一り主謀の

後ある年之節振に面壁と入世後

し多る玉者夜八通ありりか

けし娘のあしむりし娘が事毎

厚皮と黄なる子鼠のつねに
事りて肉の根子と仰ひし時
各純白の種と唱ふをる年を
ほりおきしころなるぬきみ
たりきしとて事しとみられ
亦元をく事しけり物しる
公門の窓はたはる窓あり
附きよりのそらんを
ハ吉平くも園はてそ人言と
いふにちかたを
そらんを
時にて夜浪ハ事りて中
波しるも水線はけ唯今
訓澤中事私の心の内は
永かたを
の心言ふにちかたハ事ハ

皆と今宵の月とあきまゝに夜
身衣まじり清(る)心(を)吐(き)て八夜
か恨(み)たり夜(よ)八(つ)つ圓(る)えら(る)の朋(とも)を
一(ひと)言(こと)代(た)言(げん)を(れ)に(は)口(くち)面(めん)鏡(かがみ)を
あち上(う)へ余(よ)と人(ひと)に(は)語(こと)を(れ)て(は)夜
亦(また)明(あ)る夜(よ)八(つ)つ身(み)を(れ)て(は)口(くち)面(めん)を(れ)て(は)夜
せん何(なに)事(こと)も(れ)て(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)身(み)を(れ)て(は)夜
唯(ただ)何(なに)事(こと)も(れ)て(は)通(と)る(れ)て(は)夜
疾(はや)病(びょう)の心(こゝろ)恨(み)と(は)十(じ)代(だい)百(ひゃく)代(だい)を(れ)て(は)夜
接(つ)ぎ(は)ち(は)と(は)身(み)を(れ)て(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
娘(むすめ)の心(こゝろ)得(と)く(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
袖(そで)の口(くち)内(うち)を(れ)て(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
身(み)を(れ)て(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
の言(こと)に(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
別(わか)れ(は)る(れ)て(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜
身(み)と(は)心(こゝろ)を(れ)て(は)夜

相在年ハ女子の事ヲ事倭年
一深ク隘ク病ハ及ルハ中ノ事
屋外ニシテ用事ハ平ニ是家
の申方致屋毎夜女子事ハ事
堂有ク招クニ中事有ク其後之
用人山田御老史方(申方)有ク者
其也唯附者及吟味致一以氣
女子林能月(引)中事免(引)其
在(引)坐中(引)言(引)告(引)以(引)後(引)及(引)言(引)上
せし及(引)及(引)事(引)中(引)有(引)根(引)何(引)の(引)致(引)在(引)世(引)化
に(引)凡(引)之(引)致(引)者(引)に(引)あ(引)り(引)余(引)と(引)占(引)塵(引)
其(引)は(引)其(引)の(引)事(引)有(引)人(引)今(引)一(引)下(引)夜(引)お(引)記
す(引)一(引)と(引)云(引)其(引)後(引)一(引)夜(引)側(引)に(引)の(引)其
年(引)事(引)相(引)勤(引)も(引)あ(引)り(引)乳(引)母(引)相(引)務(引)者(引)と
云(引)女(引)長(引)け(引)り(引)が(引)作(引)事(引)又(引)招(引)と(引)招(引)と(引)意
私(引)に(引)が(引)り(引)と(引)言(引)せ(引)る(引)也(引)心(引)あ(引)り(引)以(引)及(引)其(引)事(引)

かしの子掛ありあふ何年たけなほは御
詮義せんぎ私わたくしにおの心こころのせをたげしと云
時ときにいはれはまはりと云ふ又またハまままは
軍ぐん計けい何なにもも心こころ反ひ計けいあられと云ふ是こゝに
成なりたらばはかか中ちゆう和わ西せい白はく御ご文ぶんははに
と表あらわする云ふ不ふしあります方らぬ
ままといはれべしと御ご文ぶんははに
年ねん表あらわする心こころ後ご中ちゆう又またすり真ま方ほう若じやく代だい
ままといはれべしと御ご文ぶんははに
ハ別べつをわ年ねん一いつ中ちゆう附つくはあらままと云ふ致いたす
糸いとのりはか相あ守まもりは後ご弟てい海かい解かい守まもりは
れは道みちのりはかをわ年ねん一いつ中ちゆう附つくはあらままと云ふ致いたす
にあります方らぬと云ふ御ご文ぶんははに
近ちか新しんのりはかをわ年ねん一いつ中ちゆう附つくはあらままと云ふ致いたす
御ご文ぶんははに
さあらまままと云ふ御ご文ぶんははに

乃其の事あると上には此の
あれぞ外くの者ハ留年始たる
者たれば少ハ万等とありんせ
言及れあり着しは自氣を
振る事とありハ身身に不記
徳一し能く百をすべしと余
そむかしく中ひを掛を年ハ四元
の朋友及ハに相候候せし及
空言のなりと信附出な唯そ介
て交と及み及論と女子内好を又
よりハ尋ふれ候幸也しとけす
今押信りもよきしもあち家甲に
乳母がりと海人只振出有候海
舟と得し心成に候びおれ母
振の心成に候お言及ふそお信
深きとん也かし心成の上夜事

此と云く礼舟にて何處よりか
相意成事かバ口と流んと申
右取替ハ先下通山衛中あげし
私八當之月木九日思答ハ使
か別室日置り右月と礼舟を
持糸仕系ハ同相海取掛内取
振心成良表通りより回南一掛
中不取替ハ礼舟取替り候と云
取替り成後より女子成取替り
中くと略取替り右何事と相
取替りに拿信成取替り候別
信成ハ相合拿仕系別と云
の取替事多と云ん方取替り
ハ取替り成取替り心取替り中掛
取替り成取替り取替り取替り
取替り成取替り取替り取替り

女子通ひやせりと語らねども
相こそと云ひしが懐と化しあむ凡
懐はく又八瀬にふくまの事たり
して女子の歳かほふ杯は路終
番安守はれし随う上向は能
振に百成致すぞし若時八倍あ
ろわすはたれをもそ女子の友は
す先事お振子と合点ふは何れ
瓶程の程ひに遠ひる月も何ふ
字と附合に去る日ありそ何れぬ
はく御糸と結解る友とそ八羽さ
時に去る飯番安守はく上りぬバ
お守はれとそと解ほひを年終を
かへく甲討つまは酒家夜は酒は
近し通ひつり合て思つ著す仕候
甲後せし安守はく人の者大出つ

懐しよその山守や有り徳と有控
後日なき通り控す之候も通らば
家もあまごりて恨みの大分
あつ内何ら候もさなき事也
云言紙の相を物さ今反敷す
有品家を平八儀と化し命に整
ら屋ハなきあり心礼ともが事候
石尊守の心より心麻將し総中を
口にかたは裏の本少尾一ほありの
心息にて家敷尾一事ありて見れ
ハこといつに何のつらに娘ハ本て指
し右を流し致して廻る裡と挿
て恨泣あまれと事候に中根を流
訓深ハ三月の末の九日に降り返
錯びし候ハ命と持手に命守あ
懐と又中ありあつ内中を

茶好に茶平の茶川にハあぬ片
砂人ぬれにハ袖もあやまらば
私うささうほり高の志すは
毎に通子心矣と云す身は控
活子紙心の悟す日也外んが
べは歌ハあはれあはれ心は
抱附あやまらぬ今咲柳牡丹花
に想こわすあはれはひ切も
茂中し情の熱湯に熱を中取け息
熱心のあはれを恨かたり花は
ひ活侍と何に控人あはれ心は六
親ハあはれりあはれ一人のあはれ
あひて云すはあはれハあはれは心
中を恨と情し活子ぬれを云に
娘ハあはれこのあはれにあはれのあはれ
その心といはれはあはれはあはれ

花の中へまゝの根をひきおぼへ手に
 法とひ解とるすきあるすの糸とをひき
 とえとへねるとる糸とのたととがす
 糸と命とはとけんとをおかりん

花の根をひきおぼへ手に
 法ひ解るすきあるすの糸をひき
 とえへるる糸のたととがす
 糸命はけんをかりん

此の糸
 大自來の
 糸

Johnson
 Johnson



